

現代の幼児教育と倉橋先生思想



山下俊郎

今年、倉橋先生が亡くなられて十年になる。その記念講演をということで、今日は日本における幼児教育と倉橋先生思想——つまり、現代の幼児教育と倉橋先生とのつながり——といったようなことについてお話ししよう。私は倉橋先生の晩年に、いろいろなことで一緒に仕事をさせていただいたという御縁で、講演をひきうけました。

今日、お話す内容は、先に出版されました倉橋選集第一巻の中にでてくるものにつきるといってもよかろうかと思えます。先生のおかきになったものには、この中にでてくるもの他、多くあります。先生の著書の一番中心になると思われるものがこの第一巻に組まれていると考えることができます。倉橋先生のお書きになったものを、この数日間、忙しい合間をぬって、読みなおしてまいりました。話の順序上、私の言葉で要点を述べるのが必然的に多くな

ってくるのですが、先生のおかきになったものには、先生独特の言葉の使い方がありまして、言葉のニュアンスの豊かなものがたくさんありますので、それをお伝えしたく、ところどころ、その本の場所を読んでみることにいたします。

まず、先生の著書には、古くは「幼稚園雑草」、そのあとで「幼稚園保育法真諦（昭和九年）」があり、これは当時の女高師の夏の講習会で講演なさったものを、そのままとめたものです。さらに戦後それを再版した時は、保育法をとってしまつて「幼稚園真諦」となりました。これは幼稚園の保育というものに対する考え方を体系的に現わしたものだと思えます。その次に書物としてでているのは、岩波書店・大思想家文庫の中に「ルソー」とか「ベスタロッチ」などがありそれらは別の人がかいているが、その中の「フレール」を先生が受け持たれました。フレールを通してその中に先生

の考え方というものがはつきりとでているという意味で注目すべきものです。終戦後、雑誌「幼児の教育」にずっと連載されたものに「子供讃歌」がありこれはのちに一冊の本になりました。子どもをたたえる歌という意味で、随筆ふうに、若い時分からのかいとおられ、この中にも幼児保育に関する考え方が随所にはつきりと現われているのを見ることができます。

ここで私は、「幼稚園真諦」と最後にいった「子供讃歌」の二つを中心に又ときには「フレール」を読んで話をすすめていこうと思えます。

私が直接先生に接したのは、これは「子供讃歌」にもでていますが、皇太子殿下がお生まれになりました際、先生は皇太子の保育官（正式の辞令をもらわれたかどうかはわからない）という役につかれ、皇太子のお相手をなさったというようなことがあるようですが、ちょうど皇太子がお生まれになった記念に、皇室から御下賜金があり、それを基金としてつくられた財団・愛育会を通してです。愛育会は、子どもの愛育に関するいろいろの基礎的事業をすると同時に研究所をつくるというのが最後の目標でしたが、それらの前段階に調査研究をする愛育調査会というのがつくられ、そこで先生は、指導的立場をとられ活躍なさっておられました。（現在は立場や体系がかわり、日本総合愛育研究所になりました）この研究所が昭和十三年につくられ、私もその研究所の仕事をする職員として永い間つとめ

てきましたが、先生は顧問として、私どもにさしずをして下さいました。研究所の中は医学の部門と私ども心理教育の部門と二つあり、後者のうちあわせ会がありますと忙しいにもかかわらず、いらっしやり、私どもと議論なさったり、指導、アドバイスをしてくださいました。私は文字の上では心理学の大先輩の先生の書物によく接してりましたが直接に接する機会があったのは、この昭和十三年以来です。

終戦後、坂元先生が文部省で幼稚園のことをする責任の地位におられた時分、倉橋先生は坂元先生の御相談相手であり、その倉橋先生の仕事の手伝いを私がしました。のちにふれる現在の幼稚園教育要領の前身・保育要領をつくる仕事です。その頃、そのことで、たびたび先生におめにかかる機会にめぐまれたわけですが、そういうことをやっておりますうちに倉橋先生は、幼児についての科学的な研究が、一貫した保育に関する研究が必要であるから、一つ学会をつくるのではないかということで、日本保育学会が昭和二十三年十一月の第一回の総会の時創立され、お亡くなりになる昭和三十年まで会長をつとめられました。（山下先生は倉橋先生のおとをうけつがれ、現会長）こういうことで私は先生と接したわけですが、

一、子どもに対する考え方、保育に対する考え方

倉橋先生が常に強調されたこと、常に先生の頭の中にあつたこと、したがって、常に先生のおかきになった書物や先生の思想の底を流れていた一番大事なことは、子どもにふれること、子どもともにあること、子どものところにいること、子どもから出発するといったようなことではないかと思ひます。極めて、当然のことですが、子どもはうっかりするとわすれることがしばしばあります。こういうことに関して、倉橋先生のおっしゃっていることはたくさんありますが、「子供讃歌」のこゝはじめの方に「角帽生の子供遍歴」というのがあります。先生は子どもに接するために一高の学生時代から当時のお茶の水の幼稚園に始終入りこんでいらしたらしい。大学に入り、心理学を研究されるようになってからも、ちよくちよくいらして、子どもにふれておられたのです。

「角帽には角がある。彼の引きつづいてのお茶の水幼稚園通いも児童心理研究という四角ばい名目がくっついてきた。幼稚園の先生方からみれば相変らずの青二才、幼児たちからは、相変らずの『おにいさん』当人とても、相変らずの子どもの坊やなのだが、ただ大学でこの頃聴講した心理学の講義や読み始めた児童心理学の書物が彼の頭に、子どもを概念化し、その興味を理論ばらせて、いささか好ましくない(?)傾きを与えずにはいかなかった」

(倉橋惣三選集第一巻)

このような言葉で、心理学なんか勉強してしまうと子どもを概念

化してしまうという自己批判的なことをいっておられるが、概念化することをきらい子どもと一緒にいるお兄ちゃんだということを強調している。このようなことについて、一、二例をひくと女高師の先生になられてからの中に、こういうのがある。

「従来から始終幼稚園にきていたが子供と遊ぶのを楽しんだ時代、あとでは児童研究のための時代で幼稚園研究とか、保育理論とかいうことは、彼の別段興味をもたないことであつた。つまり、ひとりひとりの子供の集まっているところというだけで、幼稚園といういれものや、何のために、そのいれものへ子供を集めるかということは無頓着であつたのである。今から考えるとおかしいようであるが、幼稚園を主にして、子供をあとにし、その対象にするくせが、初めからつけられなかったのは彼のために幸いでもあつた」

(倉橋惣三選集第一巻)

幼稚園という入れ物にとらわれてしまつて、子どもをみることを忘れてはいけないという終始かわらない先生の考えがでてきます。

又、外遊された際(大正八年十一月)にアメリカのある児童図書館・児童遊園地をごらんになり、そこで考えられ、扱われている子どもの姿に、子どもの生活があると深く感銘されました。このことから、子どもの生活ということに重点をおき、子どもを大事に考える先生の基本的考えがうかがえます。

●幼稚園という名称についての先生の人間的な感じ方

戦後、学校制度が現在のものにかわった際に幼稚園は学校体系の中の一つとして、位置を占めるようになりました。よく制度のかわるときに名称がかわる場合があります。坂元先生も倉橋先生追悼記の中でお書きになっているように「幼稚園」を「幼児園」とか「幼児学校」という名にかえるわけにいくまいかということを倉橋先生にお話になったそうです。坂元先生は新しい教育精神をもちこむためにと考えておられたのでしょうか、倉橋先生は、「いろいろ考えてくれるのはありがたいが、我々、明治以来、幼児の教育に献身してきたものにとっては、幼稚園という言葉の中に幼児への愛情と、幼児教育の伝統とが結晶したものになっている。だから幼稚園という名称をぜったいにかえないでほしい」ということをおっしゃったそうです。

又、戦中幼稚園が当面した問題として、当時、「幼稚園とは金持ちの子どもが行くところであり、ぜいたくなものであるため、この際やめて、それにかわる戦時保育所をもっとつくるべきだ」ということがしきりにさげばれ、幼稚園廃止論というものがかなりありました。現在、保育所は児童福祉法という法的根拠のもとに施設が在るのですが、戦前はそのようなものがなく、各府県で戦時保育所をちゃんとするために条令をつくり、幼稚園をなるべくおさえて、保育所にうつすということがありました。しかし、幼稚園関係の人は、幼稚園とは、花園、子どもの園であり、そこに子どもを守

り育てるところに、ふくよかな、温かい意味が含まれているという倉橋先生の考え方を常に持っており、幼稚園を守ろうと努力したわけです。

今、偶然に戦時保育所と幼稚園という問題ができましたが、先生は「幼稚園は学校教育法、保育所は児童福祉法というそれぞれ異なった法律に基づいてつくられた施設であり、歴史的にいつても、その起源も流れもちがうわけである。しかし幼稚園の子どもも保育所の子どもも等しく人の子であり、等しく日本の子どもであり、私どもの子どもでもあるという意味においては区別されるべきものではない」とすでに幼稚園と保育所の一元化論を持っておられました。

私どもも、等しく日本の子どもを教育する機関である限り、扱いは、保育のされ方について差別すべきものではないという理想を持っておりますが、戦後、機構の上では、全く異なった二つのレールの上を走りだしており、機構上の一元化は無理です。内容について、一元化の方向を随分と心がけているつもりです。

ところが倉橋先生はすでにずっと以前から一元化論に関する意見をもっておられたのです。

先生は学生の時分から、お茶の水の幼稚園にだけでなく、精神薄弱の教育をしている滝乃川学園にもいっておられましたし、盲啞学校のことも考えて、そのそばに下宿されていたこともありました。その一つながりのことの中に、二葉保育園(新宿区四谷)のことがか

かれています。この二葉保育園は明治年間に日本で最初に独立した保育園としてできたものの一つです。女子学習院幼稚園に勤めていた野口幽香先生が通勤の途中に貧民街、スラム街に遊んでいる子どもたちをみて、こういう子どもたちのために幼児保育をしなければならぬという意図のもとに開園なさったもので、ここにも先生は始終いらしていました。

「こういうきたい子どもたちに対しては、いる間じゅうどうもしつくりいかなかった。

子どもに直接ふれるというよりも、保母さんのずつとろにあって、じつと傍観していたということが正直なところで、いわば、お話の上手なお客分にすぎなかったと告白したところだ。

しかし、彼は二葉保育園、とくに野口女史の教訓によって、幼稚園と保育所は教育の場所として差別がないことを、つまり幼児の社会境遇によって教育の使命は少しも差別してはならないことを彼の幼児教育修業のはじめから信じさせられたことは幸いであつた」という言葉でいっておられる。

倉橋先生はこのようにすでに学生の時代からすなわち、今から約六十年も前から、今日、子どもの考えている一番最初のところを切り開いて下さったわけです。

●当時の新保育についての考え方

外遊された時、コロンビア大学のヒル女史に会い、いろいろ話を

されました。

「外遊した時に、彼はミス・ヒルに教えられて、アメリカの各地のいわゆる『新保育』幼稚園をも多く訪ねたが、どこでも彼の目のつけどころは幼児の生活の実際であつた。『新保育』の**新**が、**旧**をやぶるだけの新型だけになりやすいことを彼は知っていたからである。そして彼は卒直に言えば、どこでも感服したとはいいがたい」

(倉橋密三選集第一巻)

ということは子どもの生活、幼児の生活というところに一番大事などころがあるので、子どもの姿がいわゆる新保育であり、子どもを新しくみなおすというところから当時の新しい新保育というものの考え方ができてくるのです。この新保育を考える場合に、フレール主義・いわゆるフレールアンオルソドックスといわれる人びとの考え方がよくひきあいだされます。そこで、明治末期から大正の初期の幼稚園に対する、特に倉橋先生が幼稚園というものに直接ふれ、情熱をもたれた時期の状態と、フレール主義というものに關する考え方をあとづけてみたいと思います。

フレールアンオルソドキシ・正統的フレール主義というのは——こまかい仕方の恩物を全ての子どもがやり、細かく時間に区切られた時間割主義に徹底したやり方であると倉橋先生もかいておられます——明治の初期以来ずっとつらぬいてきた末梢的な恩物主義、つまり恩物ばかりをあつかうという傾向が強い上、名古屋大学

・古木弘造先生の「幼児保育史」の中にもでてきておりますが、時間割主義的な考え方がかみあったものです。

その一例を大阪の愛珠幼稚園の保育案からみてみましょう。

月	日	習法	遊法	歌	食	び
9	00	習法	遊法	歌	食	び
9	20	習法	遊法	歌	食	び
9	50	習法	遊法	歌	食	び
10	00	習法	遊法	歌	食	び
10	30	習法	遊法	歌	食	び
11	00	習法	遊法	歌	食	び
11	30	習法	遊法	歌	食	び
12	00	習法	遊法	歌	食	び
1	00	習法	遊法	歌	食	び
2	00	習法	遊法	歌	食	び

のように月々土曜日まで細かい時間でぎざんであります。このことは、子どもの活動自体に中心がおかれていなかったということですね。このような流れが、先生が主事になられる当時まであったわけですね。そこで先生は、保育理論研究にうちこまれるようになりま

す。このとき、まだアメリカの児童心理学の父といわれるスタンレーホールの新幼稚園論もなかったし、モンテッソーリの名も新教育理論の指導者デューウィの名もとよりなかったのです。先生はいつものように子どもの自然、ただから新幼稚園をおしえられたのです。当時の幼稚園の状況、まわりの幼稚園の状況に対して先生はこういっておられます。

わたつての広いことは彼にはわからない。東京内として一口にいえば、ただそれぞれの伝統に従ってなごやかなものであったらしい。ミッシェンの幼稚園では、アメリカ(古い)輸入の相当厳密なフリーベリアンオルソドキシニーであつたらしいが、市内一般の公私立幼稚園がそうであるごとく、なまぬるいお湯をわつたフリーベリアンオルソドキシニーというところであつたようだ」(倉橋惣三選集第一巻)

フリーベル主義のやり方、恩物に固執しているやり方から、多少それをやわらげようというきざしがあつたのでお湯をわつたなどという表現をされていますが、幼児に対する理論的な考え方をなきる上で、こういう古いフリーベル主義のやり方にかなり疑問をもたれました。これはアメリカのいわゆる新教育・進歩主義教育論者の連中も疑問にしたところですが、子どもの生活を直視するなら、フリーベル流の末梢的な恩物主義というのは、子どもに適せず、意味がないということにきづかれるわけです。

◎保育理論研究者としての時代、新しい保育・新保育論の展開

大学を卒業され、主事になられる大正初期の間までがこの時代であり、先生の論は最初関西で緒口が切られています。「子供讃歌」の中にも「彼の保育理論を育てた関西保育界」という言葉で一つの章がとられているごとく関西で望月くに女史を迎えられ、倉橋先生の新理論が次々に展開されていったわけです。この場合、論の核心は結局、フリーベリアンオルソドックスの考え方——末梢的な理屈

の多い、昔からのしきたりをまるつきりはなれることのできない伝統主義と論理主義にこりかたまっている——に對しての疑問から出發していたわけです。

そこで先生は、いわゆる新しい保育の新ではなく、真の保育の新保育というものを求めているのであるという考えのもとで、「當時の新保育」という中に

「新まいの園丁に大した花壇の設計なんかできようもないが、一応気をかえるためにしたことは創園以来の古いフレイベル二十恩物箱を柵から取り降して、第一、第二その他系列をませこぜにして竹かごの中に入れたことであつた。すなわち、恩物を積み木玩具としたのでありこれは特別の意義をもつものとして取り扱われた恩物の格下げか、一般玩具としての横すべりか、みようによつては論議のありそうなことだが、彼はただ幼児の積木遊びを、幼児の積木遊びとして幼児たちにさせたかっただけのことである。もちろんフレイベル原理の研究用としては、正統な恩物のいく組かを残しておいたが、その他は積木のかごとして各保育室にわち備えられたのである」

(倉橋惣三選集第一巻)

というのがあります。私もよく先生から、「ぼくはお茶の水幼稚園の恩物として大事にしまわれてあつたものを全部竹かごの中におろしちゃつた」ということをしばしばかせられました。

「新園丁が同時にしたことは、従来、遊戯室の壁にかけてあつた

フレイベルの肖像画をとつて職員室の壁面に移したことだ。これは箱の中の恩物よりは人の目につきやすい広間の正面のことだから、思い切つた模様がえであつたかもしれない。ことに四月二十一日のフレイベル誕生日には毎年この額の前で祝いが行なわれたりしたのだから、外来の參觀者にもふしぎに思われなくてもなかつたらう。彼はもちろんフレイベルを尊敬してその肖像を仰ぐ心において人後に落ちない。だから職員室に掲げたし、後にブランケンブルヒに行つた時、その原版を買い、わざわざ持ち帰つて、その後ずつと長く彼の主事室に掲げた。」

(倉橋惣三選集第一巻)

先生は子どもたちにフレイベルを仰がせる必要がないと思われました。フレイベルの精神というのは、子どもがフレイベルをみて何かをくむというのではなく、保育者がフレイベルの精神をくまなければならぬものであるから、その像を遊戯室から職員室へとうつされたわけなのです。

◎会集に対する考え方

新園丁(主事)になられて先生が最初にされたことは、朝の会集をやめるといふことでした。

「子どもには子どもに則した生活があり、幼稚園は子どものためにあるべきだ。自由に遊んでいて、それがだんだん自然にまとまつているいろな活動がでてくる。即ち、アット・ホーム的な幼稚園生活の場を重んじ、子どもの活動を重んじる立場からすると必然的に

こういう考えがでてこなければいけないはずであろう。子どもの自己活動、自発活動というものに中心をおいた保育理論がくみたらなければならないはずである」という考えにもとづいて、会集における先生中心主義や、それによって子ども自身の遊びの流れの中断の危険などを考えておられます。

このように、先生の考えの底を流れているものは、子どもから出発して、子どもとともにいて、子どもの生活を大切にするということにつきるわけです。

二、幼稚園真諦について

幼稚園真諦は昭和八年のちょうど今のような夏の講習会で先生がお話になりましたものを書物にまとめたものです。久しく絶版になっていたものを昭和二八年に再刊され、その時「幼稚園保育法真諦」の保育法をとって、「幼稚園真諦」となったわけです。

「フレイベルの精神を忘れてその方法の末のみを伝統化した幼稚園を疑う。定形と機械化によった、幼児のいきいきしさを奪う幼稚園を慨く、幼児を無理に自分の方へ捕えて、幼児方へ赴き即こうとするこまやかさのない幼稚園を忌む。つまりは、幼児を教育すると称して、幼児を先ず生活させることをしない幼稚園に反対する。」

——しかもこれ皆、他に対していう言葉ではない。そこで私は思い

きって従来の幼稚園型を破ってみた。古い殻を破ったらその中から見つけられたものがこの真諦である。

この小さい本は幼稚園保育の全体美を取り扱っているものではない。幼稚園というものを、その真の面目において、生かすべき実際の姿を捕えたいとしている。この意味において保育法の平らな概説ではなく、寧ろつきつめた主張の書である。まず丹念に私の言おうとしているところを汲みとって頂きたい」(倉橋惣三選集第一巻)

これは再刊の時に初版の序文をそのまま用いられたものですが、時の流れを超越した先生のお考えがおわかりだと思います。又私は終りの言葉に非常に打たれたのです。それは、

「説くところ必ずしも新説でない。ただ初版の序文に記した『身を幼稚園に置くこと久しい。疑惑と攻究と、また、いつも付きまとう遅滞とを経て、やっとここにおちついた考え方である』という小さい自信は今日も変わらない。また、初版当時新しいと危ぶまれていたことが、今日こそよく理解せられると信ずる。ただまだ広く実現されていないことを憂うる」(倉橋惣三選集第一巻)

私が雑誌「幼児の教育」の昭和30年・先生が亡くなられました時の追悼記の中に書いたと思いますが、先生は

「今新しい保育とってさわいでいる——保育要領が編まれ、それらがいわゆる新教育理念によるところの新しい保育——が三十年も前から自分の言っていることで、何も新しいことではない。た

だ、それが実行されなかったことを自分は残念に思うので、教育の思想は実行されてはじめて生きるのだ」とよくいっておられたのを最後の言葉をよむたびに思いだします。

① 教育における目的と対象

一番最初に教育における目的と対象ということ述べてあります。一口にいえば「幼児の方へ保育者の方から近づいていき、対象に則するという心がまえがなければいけない」といっておられる。そしてそのために幼児の生活がどうあらねばならないか、幼児の生活というものに対する幼稚園の生活の形がどういうものか、どういう形でなければならぬかを力説しておられます。

どういう生活をさせるかについて、

「今日までの幼稚園保育法の研究は、子供の能力に属する方面やその教え方の細かい点において多く行なわれ、幼稚園生活については行なわれていなかっただ観があります。これを要するに、幼稚園の真諦は、何を保育の目的とするか、いかに能力に相当させるかということを考えるだけでなくして、いかなる生活形態に幼児を生活させるのが、幼稚園の真の姿、実体であろうかと言うことでなければならぬのであります」

(倉橋惣三選集第一巻)

それは結局幼児の幼児らしい本当の幼児らしい生活をするようにならなければならないということです。むりに幼稚園に子どもをお

しこむ、概念的に幼稚園というものを考え、子どもをひっぱって置いてくるという感じが強いけれども、そういうものではなく、子どもがその中で生活しているのだという形をとらなければならないわけで、よく先生はこのことを「生活へ教育」という言葉でおっしゃっています。

幼稚園が教育の場である前に、子供自身の場所であればならない。子どもが自分自身の生活をせいっぱいに築に、自然にできるところでなければならぬということを、さらに自己充実という言葉で、いっておられます。

「子供が自分の生活を先生の教育計画で指導される前に、いわんや教育される前に、先ず自己充実の一杯にできる自己の天地をもちうるように、幼稚園でも十分迎えてやりたいものです。これが保育法の真諦の全部ではありませんが、少なくともこういうところに出発点を置くべきではないでしょうか」

(倉橋惣三選集第一巻)

つまり、子どもに子どもらしい生活をせいっぱいにさせるということです。子どもが子どもの生活の中で自己充実をせいっぱいするにはどうしたらよいかということについて、

「自由に生活できるようにさせるためにまず先生が設備を用意しなければならぬ。設備の背後に先生の心がかくれていなければ、いけない。つまり、先生の子供に働きかける意図・意志が設備のうらにかくれていなければならない。しかもその中に子供が自由に活

動する姿がなければならぬ。適宜・適切な設備のもとに幼児の生活が自己充実を充分發揮できるといふことが幼児生活の充実指導です。充実指導により子どもが自由にふるまえなければならぬのです。その自由度が問題です。恩物のあつかい方についての例をあげて説明すると先生の意図で積木が与えられていて幼児の自由な活動は全然許されていないという自由ではこまるという意味です。

そこで自己充実を満たしていくために指導していくことが充実指導であり、それをさらにすすめて指導していくことが誘導です。

誘導とは、非常に断片的で、まとまりのない幼児の生活を、系統づけたり、すじ道をつけてやり、發展させてやるものです。また、系統づけるところに幼児の興味とということを考えていかなければなりません。興味とというのがおこってきて、幼児の生活をだんだん發展させていくことができるわけです。

だから、先生の教育的な意図と設備とによって、幼児のもっている内面的なものを發展させていくところに誘導というものがあるのです。その誘導というあとに教導というものがありますがこれは小学校にいったからやるもので幼稚園にはあまり重点はありません。

幼児の生活とは、そこから自己充実があり、設備が関連して自己充実指導を行ない、さらに誘導を加えていくことによって子どもの生活がのびてゆくのであるというのが倉橋先生の基本的な考え方なのです。では先生のあり方についてみましょう。

先生とは強い存在であってはならない。というのは、幼児には幼児としての生活があり、先生があまり強いと幼児の生活をぶちこわしてしまふ。第一に外からみて強い存在にみえないことはもちろん、第二にはそこにいる子どもたちにとってけつして強い存在に感じられないことです。このところが、幼稚園というものの、本当の特質を実現しうる非常に大きな問題であると思われまふ。

だから実際からいうと、幼稚園の先生というのは子どもに対してはどこまでも身近な存在だけれど、しかも子どもたちのために指導することに於いて、誘導することにおいて、教導することにおいて細やかな実に周到な考えをもった人でなければならぬ。表面にたないで裏で子どもの生活を望ましい方向へたえず向けていくようなうごきを計画し行なっていくような人でなければならぬのです。

② 保育案について

今日カリキュラムというものについては戦前、戦後、現在にいたるまで、いろいろな論議がなされてきましたが倉橋先生のいつておられることについて一、二例をあげると、

「保育案とは、子供の生活へ教育をもっていくためのものである。保育案というのは時間割ではない。保育案は誘導の本源である。

そこで保育案のほんとうの意味は何であるかということになりまふ。私の考えを一杯につよめていってみますならば、幼児生活の自

己充実にこちらで案をたてることはむずかしい。また充実指導にもこつちで案をたてることはむずかしい。ほんとうに案らしい案をたてられるのは幼児生活の誘導の所です。誘導の本源としての計画においてこそ、案がたてられる。すなわち幼児生活そのものを、どうこしらえて、形を変えていくかということではなく、あるがままの幼児生活を、どう誘導するかという所に保育案がたてられるのであります。

それから、保育の意義についてももう一つのことがあります。

前のは、どこまでも子どもの生活を本体として、これに則して考えたのでありますが、この他にいうまでもなく先生方の目的を偏りなく、子どもの生活の中にもっていくについて、ある方面が欠けないように、ある方面が多すぎないようにと、自分の注意として心覚えを立てておくことも必要であります。ことにその保育として個々の目的は漠然たる大きな大目的を実際化しているのですから、小さい子供にはどんなことをしようとか、年長の者にはどういう方面を進めようとか、同じ目的も子供の年齢に応じて、種々に分れてくるに相違ありません。それを先生としては、正しく用意しておかなければなりません。すなわち、子供の生活の方からいえば、どういう事を中心にして子供の生活を誘導すべきかという案が立ち、先生の方としては、常の指導の中にどういう点を特に心がけていくべきかという心覚えが予め立てられなくてはなりません。つまり子ども

の生活に則する方の意味と先生の目的に則する方の意味と二つのものになるわけであります。」（倉橋惣三選集第一巻）

そこから誘導保育というものがでてくるわけです。それは、幼児の生活にまどまりのある何ものかを与える用意をする。そのまどまりの選び方というのは、子供の年齢と環境から考えられる興味のある条件というものをもとにして考えられなければならないのです。

これが主題とか、テーマとかに当るものです。保育案と保育内容がお互いに関連している、結合しているということ、個々の活動が教育的意義をちゃんともっているということが考えられなければならないません。ようするに、テーマ主題というものと、関連をもち、有機的に主体がくみたてられていくべきものなのです。そこに統合されるものとして、先生は保育案と自由遊びについてふれています。

——自由遊びは生活につながっているものであるが、必然的につながりをもたなければならぬものである——

③ 保育課程の実際

一日の保育の流れについては及川先生のお話にあったようで、はぶきますが、大事なことは、一日一日をその子どもにとって満足のいくものでありたい。先生の意図や、強要で子どもの生活が断片的になつてはまずい。自然に一日が流れるような中に、自由感がなければならぬ、といったようなことを強調なさっています。

又、子どもに対する対し方について、

「子どもを主にして考えられる場合、一人ひとりの子どもが保育の対象でなければならない。それがだんだん小グループに、そして、組全体になる。つまり、個——分団——組とそれぞれの活動が展開されていく。それぞれの対し方を考えなければならない」とおっしゃっています。

「幼稚園真諦」の内容に則しての話は、時間の関係上この位にして
三、倉橋先生の晩年におけるいろいろな問題と

私どもに残して下さったものに対する反省

文部省で坂元先生が中心となり、今の幼稚園教育要領の前身・保育要領をつくり、先生もその中で非常にほねをおられましたのが、昭和二年から二年にかけてです。先生が大正六年にお茶の水幼稚園の主事になられてからちょうど三十年たっておりです。三十年以上も前から先生がいておられたものが、新しい要領の中に生きているということは、全くうれいことです。

「幼稚園真諦」の最後の言葉に、

「初版当時新しいと危ぶまれていたことが今日こそよく了解せられると信ずる。ただ広く実現されていないことを憂うる。教育の思想は実行されてはじめて生きるのである」とありますが、よく先生は「三十年も前にいっておったことなんだよ」とおっしゃっていたこ

とを思い出します。

幼児の生活にスタートするという考え方は教育史上生活論という意味で歴史的意義がありますが、幼児からスタートするという考え方を示されたところ、先生の偉大さをかみしめてみる必要があるのです。

保育要領を編むにつけ、アメリカの指導官ヘファナン女史の指示のもとに仕事をしました。

保育内容を考える場合、その前の幼稚園令などの中の考え方と異なって、楽しい幼児の経験という意味で内容を考えていきました。

楽しい幼児の経験という意味で内容を考えていきました。基本的なものができています。これはあくまでも子どもの生活にそってやっていくということで、いわゆる新しい保育ということでは

幼児教育史の中でアメリカの——二十世紀はじめ、倉橋先生が外国にいかれた頃——デュイイ、キルパトリック、ヒルといった人びとにより、進歩主義教育となえられた時期であり、先生はそういう考え方に共鳴されておりました。内にあるものがあるがゆえに共鳴するのであって、倉橋先生の頭の中に取りましたところの理論——子どもの生活を中心に考え、子どもをよくみつめ、子どもの生活のうちこんでいけば必然的にでてくるものである。つまり、大きいうごきをするという意味で共鳴されたヒルの積木に対して、小手先で、ごちゃごちゃするフレーベルの恩物の積木を柵からおろし竹か

ごの中にいたなど、これは子どもの生活をまともにも見ていれば、だれでも気がつくことである——に倉橋先生の偉大な創造の典型的な考え方をみることができますし、それから外国の進歩主義的な教育者といわれる人びとと共鳴されたということは、その中にそういう考えがあつたからです。必然的に今日の幼児教育の中に生きていることでもあります。

倉橋先生の子どもの見方、幼児観、保育観、幼児というものの考え方、幼稚園という考え方、それらは、幼児教育を崇高なものにされました。又、幼児らしさというものに対する非常に高い感じ方、保育の仕事の崇高さを高められました。

「子供の園を荒すものはだれか」などと戦争中にいわれたこと、保育の仕事が非常に崇高であり、香り高いものであることを強調されました。よく先生は一種の情緒主義的考え方をされていたと思います。私は先生とお話するとき——「君、僕は芸術家だからね」ということをよくきかされました。先生は文章をかいても、お話されても文章に対するセンス、また一種の情緒主義ともいべきものを豊かに持つておられました。

日本の幼児教育界において先生の考え方がもたらした事柄は非常に大きなことだと考えてよいと同時に、卒直にいうなら私自身は少少不満をもっています。それは日本の幼稚園界に一種のセンチメン

タリズムが流れていると思うことです。このことに関して、戦後まもなく「幼児の教育」誌上にセンチメンタリズムを批判するという文章をかきました。これはものごとを科学的にみる必要性を主張したのです。しかし先生は情緒主義的ではありませんが、一方では科学性というものを十分考えられておられました。

一つはお茶の水女子大学に、児童学科をつくることに骨をおられたことです。児童学というものを科学的な基盤の上のせて、科学的な考え方をする人を養成しなければいけないという考えの現われです。

もう一つは、考える場として保育学会が必要であるということではじめの方でも申しましたが、私どもの下働きで昭和二三年十一月に第一回の日本保育学会が、倉橋惣三先生を会長としまして発会されました。今年で一八回もの大会を開きました。

この会は、保育所も幼稚園も一本にすべきであるという先生の理念にそつて、保育所の先生も、幼稚園の先生も、行政官も、学者も皆一団となつて幼児の保育というものについての科学的な研究をするグループという主旨により、運営されております。こういうように新しい方向の中にも先生のお考えが生きているわけです。

まだいろいろ話したりないのですが、時間の関係上またの機会にゆずりたいと思います。

(日本幼稚園協会主催・夏期講習会講演より)